

V 自閉症研究における感想・意見

～研究協力校担当教員から～

本稿では、7校9事例を担当して下さった自閉症・情緒障害特別支援学級担当の先生方から、2年間の自閉症研究に関する感想やご意見を頂いている。その内容を以下に呈示する。是非、感想等も参考にして頂ければと思っている。

1. 国語科学習評価シートを使用しての感想をお書きください。
(特に使用していなかった年度と比較した視点で感想を頂けると幸いです。)

・事例①担当教員

児童の国語科学習の習得状況を把握する上でとても有効であった。昨年までの習得の評価は担任の主観的な部分が多く、評価後の学習内容の重点化も曖昧なものになっていた。今回、国語科学習評価シートを使用することで、学習の達成状況を的確に把握する事ができ、児童の学習内容の重点化、簡素化がしやすく個別指導計画の作成にも役立った。また、簡便で持続可能な評価活動ができる評価シートだと思う。

・事例②担当教員

漠然と児童の苦手とする部分を把握していたつもりではあったが、国語科学習評価シートを作成していく中で、児童の得意な部分と苦手な部分を確認していくことができた。また評価シートを作成したことで、授業で何を中心に指導したらいいのか、また未習得の部分を再確認することもできた。

・事例③担当教員

これまで学習指導要領に定める目標に照らし、国語科の領域毎の評価は実施していなかった。経験に頼った曖昧な評価になり、目標や単元設定が対象児の実態にそぐわない内容が含まれていた。対象児の国語科に関する「話す・聞く」「書く」「読む」の内容のまとめり毎の習得状況は、この国語科学習評価シートを使用することで、学年のどのレベルに達しているのか、詳細に把握することができた。国語科の各内容のまとめり内のバランスの悪さも顕著であることが明らかになり、これらの情報を指導計画に生かすことができた。

・事例④担当教員

子どもの学習の特徴（習得状況や得意・不得意など）は、経験から「こんなものかな」と想定していたのですが、学習評価シートを使用することで、明確にとらえることができるようになった。また、下学年に戻ってチェックできるので、子どもの習得状況がよくわかった。できれば、子どもの学習の特徴を文章でまとめましたが、レーダーチャートのよ

うに、一目瞭然にできると経験の浅い先生方にも使ってもらえるかなと思った。

・事例⑤担当教員

評価シートを使用していない時でも児童は国語が苦手であるということは分かっていたが、漠然とした理解であり、国語科における児童の課題をはっきりつかめていなかった。評価シートを使ってみたところ児童の苦手な点が把握しやすく指導に役立てることができてとても良かった。評価シートの結果から「書くこと」、「読みとり」が児童の重点課題であることが分かり、授業数を増やし重点的に指導することができた。

・事例⑥担当教員

自分たちの指導計画の裏付けの一つとして、評価シートをとらえて使用した。結果的に、児童の学習の様子をより客観的に捉えることができ、計画する際の安心感みたいなものをもつことができた。

・事例⑦、⑧担当教員

今まで経験値だけで行っていた指導計画を、客観的な規準で裏付けることができた。

また、本人の実態把握についても具体的に整理することができて、授業の組み立てに役立った。(今までは「項目」だけの把握でした。)

さらに、時々、シートをひろげて確認していたが、個々に変容のあったところ、ないところを見ながら、次の単元の授業計画を考えていった。したがって、事前に考えていた計画と変えたものもあった。今まで確認は、いつも頭の中で確認していたのみだった。

・事例⑨担当教員

報告書の中でも書いたが、対象生徒は拒否反応が強く、活動できていなかった部分について、教員が工夫しながら経験させていくことの必要性を、私たち自身が感じた。無理強いをするわけではないが、私たちがさせない限り「学習する機会が失われてしまう」という危機感を持っていなければならないと思った。

2. 自閉症研究を通して行いました、特別支援学級における国語科指導の内容等の編成では何に一番のご苦労がありましたか。

・事例①担当教員

まず、対象児の得意な力を利用しながら学習を進める事が大切である。それを実現できる指導内容の編成を行う事が重要と考えて取り組んだ。研究対象児童の場合、評価の結果「読むこと」に関しては学年相応の力を持っていた。当該学年2年の単元・教材配列が「音読しよう：ふきのとう」から始まっているので、対象児の得意な力である「読む力」を利用しながら学習を進めることができた。よって、4月当初からは説明文教材を中心に学習を進め、6月以降からは説明文、物語文の教材を同時に並行して学習を進めることで学習内容の理解が促進できた。

・事例②担当教員

当該学年の教科書を使用するにあたり、通常学級と同じ内容で果たしていいのか、また評価の仕方も難しいと考えていた。また、国語の授業時間数が少ないため、当該学年の内容といっても、すべてを網羅することは難しかった。そのため、削らなくてはいけない単元もでてきてしまった。

・事例③担当教員

交流及び共同学習を推進しているが、通常の学級と特別支援学級との国語科のねらいや、単元設定について、効果的な指導計画の立て方について苦慮した。特別支援学級では、国語科学習評価結果から把握できた課題を中心に、通常の学級では、目標を下げて実施する内容や割愛する内容について通常の学級担任と相談し連携に努めた。また学習評価の結果を具体的な年間指導計画で考える際に、「枠組み」、「内容」、「工夫や配慮」についてチェックできたことで、あらためて具体的な編成ポイントが理解できた。

・事例④担当教員

国語科学習評価シートの結果から、具体的な指導内容等を編成するにあたって、「評価結果を反映させたシート(枠組み、内容、配慮)」をそれぞれチェックすることで、結果を具体的な指導内容等に反映させることができ、反映させるべき視点が明確になったと思った。また、特別支援学級でほとんどの授業をしてので、自閉症の特性に応じて指導内容に軽重をつけることができたが、交流及び共同学習が多い児童だったら、特別支援学級と通常の学級とどんな内容を指導するか計画するのが大変だったと思う。

・事例⑤担当教員

物語の内容をつかませ正しく読みとりをするために、何回も繰り返し教材を読ませる必要があり、時間がかかった。音読は、家庭でも宿題として毎日協力してもらった。視覚的に優れているので、学習において教科書の挿し絵を頻繁に使ったが、挿し絵にない事を想像することが苦手であるので、ビデオを利用して内容理解を促した。ビデオでも表現されていない教科書の内容は、何度も説明したがなかなか理解ができなかった。

・事例⑥担当教員

児童の当該学年の学習をしたいという気持ちを、実際の発達段階と学習の習得の程度の差を、どのようにすりあわせていくのかに、いつも苦心している。また、将来的に必要な内容に意欲をもたせつつ、また、限られた担任数で指導していくよう計画を考えるのが、難しいところである。

・事例⑦、⑧担当教員

同じ自閉症といえども個々の生徒の特徴は全く違い、その生徒達を同じ場・同じ時間で授業をするためには、どの題材でどのように進めていくかを決定するのが一番の課題であった。

自閉症のある生徒を複数で同時に授業するのは、知的障害のある生徒よりも難しいと感

じている。

・事例⑨担当教員

基本的に、第一印象に左右されがちな生徒達なので、生徒達がやりたいと思えるように、こちらがやらせたい内容の軽重をどうつけていくかがとても難しかった。さらに、一人一人得意な部分や課題が全く違うことも、指導の難しさを増幅させていたと思う。

生徒一人一人に合わせ、自立活動的な部分での目標と、学習においての具体的な活動目標の軽重を、普段から教員側がしっかり持っていなければならないと思った。

3. 特別支援学級での国語科指導において、特に自閉症の特性を踏まえた授業づくりでは、最も大切に工夫や配慮はどのような内容だったでしょうか。

・事例①担当教員

自閉症の児童にとって、文中の登場人物の行動や様子を想像しながら読み進めることは難しい事である。児童の文章理解力を深め想像力を広げていくためには、自分の経験と結び付けて理解させることが重要となると考えた。自分の経験を思い出しながら(思い出させながら)、登場人物の似ているところに気付かせたり、違うところを見つけ出させたりすることが、物語文や説明文を読み進めていく上で有効な手立てとなると考えた。

このように、自分の経験と結び付けて学習を進めるためには、生活科や自立活動、道徳等の学習内容と関連させ、国語科学習を進めていくことが不可欠であると考え実践を進めてきた。

・事例②担当教員

漢字練習では、筆順ごとに色を変えることもあったが、形ごとに伝えることを中心にした。(例：「位」→「カタカナのイ+立つ」など)

また、物語や説明文を扱う時に、児童がイメージしやすいように絵や写真、実物を見せたりした。段落や時には1文節ごとに細かく分けて、わかりやすいようにした。作文では、書き方の基本を伝え、それに沿って書く練習をしたり、「楽しかった」以外の感想が書けるように伝えた。

・事例③担当教員

対象児は、言語理解や心情理解が困難であるという実態を受け、物語文では読み取るためのキーワードの提示、言語理解のための絵や写真など視覚的な補助教材の活用、動作化等体験的な活動を取り入れた授業展開に努めた。

心情理解では、心情を表現するたくさんの言葉を提示し、そこから当てはまる言葉を選択させるなど、語彙の拡充に努めた。また、教科書とは別に、文節で区切った教材を準備して、文章を読み易くした。

・事例④担当教員

子どもが国語に対して苦手意識をもっているので、まず、その意識をとりさるために「わ

かる」ことを念頭に置いた。

「わかる」には、①自分の体験からわかること、②資料を丁寧に説明されてわかること、③自分では想像できなかったが、友達の考えを聞いて「ああ、そうなのか」とわかることがあると思う。授業では、②③に焦点を当てて指導した。

また、「わかる」ためには、視覚情報を与える、動作化して体感させる、ねらいをスモールステップにする、語句を丁寧に説明したり、文作りをしたりする、気持ちや様子がわかるような読み方の指導をすること等を実践してきた。

「できたこと、わかったこと」を子どもに具体的に示して、「ぼくも国語ができるんだ」と感じられるようにすることが大事だと思っている。

さらに、どうしても感じられないことや、想像できないことがあるので、その部分は、さらりと扱い苦手意識を増長させないよう配慮をした。

・事例⑤担当教員

児童は、物語文の登場人物の心情理解が苦手であるので、登場人物を自分や身近な人に置きかえ、児童が日常経験している事柄から関連づけて考えさせ物語文の理解を進めた。教科書の挿し絵の上に児童の写真を置き、児童が物語の中に登場したらという状況設定で、授業を行うようにすることで心情理解等を促した。

・事例⑥担当教員

児童本人のやる気、モチベーションを保ちつつ、必要な学習にとりくめるような、一時間の指導内容の組み立て方をいつも意識していた。自分で自立して学習を進める部分と、友だちや担任とやりとりしながら学習を進める部分をほどよく組み合わせて、一時間の流れを組み立ててきた。

また、絵や写真、ビデオなどを使用し、具体的なイメージをもてるような支援は、文章の読解には、不可欠であると感じた。

・事例⑦、⑧担当教員

一番配慮したことは、本人達が理解できるように内容の精査をすること、本人達の自尊心を傷つけない範囲で視覚的な教材を用意することだった。

・事例⑨担当教員

「やる気にさせる」ことを、何より大切にしている。特に、今担任しているクラスの生徒達は、他の生徒のその日の雰囲気や、その日の気分が大きく左右されてしまう。また、2でも書いたが、「一人一人得意な部分や課題が全く違う」ことを踏まえて、その時間にやるべき活動の提示の仕方、それぞれの生徒がどこで終了とするのかという活動量や、質についての目標作り、交渉術など、常に自分の中で、生徒達にどう言葉をかけるのが有効かを考えながら授業を行っている。